
MOON-4 夜叉 4 < 3 1 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 < 3 1 >

【Nコード】

N4043N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

和人、秀、桜、榊、そして裕希……様々な『想い』が交錯する。『闇』の愛は存在してはいけないのだろうか……

MOON - 4 夜叉 4 第2話第3章 いよいよクライマックスです。

2・月夜（がつや） - 3（前書き）

時間がある方は、夜叉1からの読書（？）をお勧めします。

2・月夜（がつや） - 3

「来たわね、夜叉。」

新宿、京王ビルの屋上で満月を従えながら桜が言った。「待ってたわよ。」

にこり、と笑う。

「随分と」

白い着物姿に赤い刺繍を施した夜叉は、中空で彼らを見降ろした。
「横柄な口を聞くのお。」

「だって、私は帝王の『権利保持者』だもの。私が勝てば、貴方は私に仕える事になるのよ。」

背後には、榊と秀。

「そんな事はさせない。」

闇に――澄んだ声が響いた。

彼は夜叉の背後から姿を現した。

碧がかった黒髪と、闇色に輝く翡翠色の瞳。

榊の隣で秀が叫んだ。

「和人っ！」

（桜にやられたんじゃないのか！？）

懐かしい記憶が甦る。

それを察知したかの様に、

「秀。2人をやりなさい。」

「！……」

「出来るでしょ、今の貴方なら。」

「……桜。」

秀は呟いた。「俺が帰る所はお前じゃない……」
裕希、そして朝子の所だ。」

「何ですって！？」

桜は振り向き、きつい眼差しを彼に向けた。

ややあつて、

「術が解けたようね。」

そう言い、「判ったわ。榊、貴方が秀と夜叉の相手をして。」

視線を中空の彼らへと戻し、

「私は帝王を――和人をやるわ。」

「いいだろう。」

夜叉の背後で和人は目を細め答えた。

ネオン・ライト
人工灯も消えた深夜の新宿で、月だけが強く輝いていた。

「大丈夫かな、和人。」

朝子が運転する赤いレガシーの後部座席で裕希は不安を隠せなかった。「何だか、桜と闘っちゃいけない気がする。」

隣の早坂が、傍らの『それ』を確認しながら、

「どうしてそんな事、言うんだい？」

「判らない。だけど、引つ掛かるんだ。」

『九桜は桜の樹の下にいる。』

それだけが、心の片隅を占めていた。

(どういう意味だろう・・・『桜の樹の下』。)

裕希は右手の親指を噛んだ。

「何かあるんだ。」

呟く。

「見て、あそこ！」

運転席の朝子が前方の天空を指差した。

そこには、月や星々の輝きを超えた2つの煌めき。

「もう戦闘が始まってるんだ！」

裕希は運転席に身を乗り出した。「急いで、朝子さん！」

「ええ！」

朝子はアクセルを踏む足に力を込めた。

夜叉は腰から龍王の剣を取り出し、榊へと向けた。

「これは、土御門より古来伝えられている剣。」

その頭上には、二本の角。「『闇』へ帰るがよい。」

「そう簡単にはやられないよ。」

黒いスーツ姿の榊が、口元に冷たい笑みを浮かべて言う。「俺は九桜の直系の血を受け継いでいるからね。」

バツ・・・

夜叉が彼の懷に飛び込む寸前、榊は天空へと待った。

「夜叉。」

秀は目を細めて言った。「榊は俺がやる・・・夜叉は桜の元へ。」

「2人まとめて、片付けてやるさ。」

榊は右手を振り上げ、炎を宿した。

バツ・・・

青白い炎が2人の間を掠める。

「やめろ、榊！」

秀はそう言うと、彼の元へ飛び込み、首を掴んだ。「お前は・・・桜を愛しているんだろ。」

「・・・」

榊の目が細まる。

「だったら、お前が桜を助ける。ここから早く逃げるんだ。」

そして、その鋭い爪が榊の胸を貫くのと榊のそれが秀のそこを貫くのはほとんど同時だった。

「つつ・・・」

「！・・・」

「秀！」

夜叉は2人の元へ飛翔した。

「榊。」

秀は榊の耳に囁いた。「それが、桜を救う方法だ。2人で『闇』に紛れる。帝王から――和人の目の届かない何処かの『闇』に行け。」

「……………」

榊は目を細め、秀から身を離れた。そこへ、夜叉の剣が降りる。

ザッ……………

剣は榊の左肩を貫いていた。

「やめろ、夜叉！」

秀は榊と夜叉の間に入った。

「何故じゃ。」

紅の唇が妖しく微笑む。「この者は帝王に逆らいし者。我が手で永久の闇に葬ってみせよう。」

「そう簡単にいくか。」

榊は呟く様に言い、夜叉の二振り目を右手で支えた。

天空の月が、2人を浮き彫りにする。

そのまま、榊は夜叉の懷に飛び込んだ。

「榊！」

秀の叫びも届かぬ様子で、榊は夜叉に、

「夜叉――お前は帝王 和人を愛しているんだろ。」

「……………」

その一瞬の隙を付いて、榊は鋭い爪を夜叉の脇腹にのめり込ませた。

「夜叉、榊っ！」

京王デパートの屋上に降り立った夜叉を支えて秀は叫んだ。「お前たちに和人は倒せない、桜を連れて、早くこの『闇』から逃れるんだ！」

「……………」

榊は冷たい微笑を浮かべ、一度だけ秀を振り返ると、

「『帝王』を倒したらな。」

そのまま身を翻して、桜と和人がいるであろうALTA方向へと飛び去った。

「夜叉！」

秀は腕の中の女性を見つめ、「お前が『降臨』してたなんてな。」

「帝王のお召しだよ。」

傷を気にした風もなく、夜叉は身を起こした。「我はあの夜、帝王の血を預かった。帝王の『賭け』じゃ。桜の事を知るための。」

「『帝王を甦らせるのは帝王の血』か。」

秀は呟く様に言った。「だから、桜は和人を倒しきれなかったんだ。」

そこへ、眼下のターミナルに一台の車が滑り込んで来た。

それに気付き、

「何つームボーな運転だ。」

秀は言った。

「行くがよい。」

夜叉は秀に向かって微笑した。「お前を待っていた者たちじゃぞ。」

「え？」

秀は目を丸くした。そんな秀の背を押し、

「行くがよい。帝王――和人は我が守る。」

そう言い、東の方向へ夜叉は飛翔した。

「・・・・・・」

秀は屋上から地上に向けて飛び降りた。

赤いレガシーが急停車する。

その車の窓から、

「秀さん！」

懐かしい声が聞こえてきた。

「まさか――裕希？」

片膝を付いて秀は目を細めた。

間もなくドアが開き、3人の姿が暗闇に浮かび上がった。

「朝子……」

裕希よりも早坂よりも早く、ヒールを脱いで素足で走り寄る朝子の姿があった。

「秀っ！」

と、彼の胸元に飛び込む間際、

パシッ

彼女の平手打ちが秀の左頬を直撃した。

「痛え。」

秀の呟きに、

「当たり前じゃないの！」

朝子は秀を睨みつけ、「一体、どれだけ心配かければ気が済むのよ！」

その頬には、一筋の涙。

「朝子。」

「秀の馬鹿！桜の術なんかに陥って。」

その胸元に飛び込む。

「朝子さん……」

追いついた裕希が彼女に声をかける。

「裕希。」

秀は朝子を抱きしめ、少年に視線を戻した。

「……悪い。」

朝子を抱いたまま、秀は裕希と朝子に言った。「悪い。心配かけちゃったな。」

「うん。」

裕希は微笑んで、言った。「でも、『終り良し』なら何でもいいから。」

「生意気な事言うねー。」

少し背が伸びた裕希に向けた視線をその傍らに立つ、早坂に移した。

早坂は、

「尾崎秀久さんですね。」

その声をかけると、秀は、

「どうも『お世話』になりました。」

「逮捕します。」

「情状酌量の余地有り？」

「保護観察処分に決定。」

早坂はにつこりと笑って言った。「懲役1時間。」

「ねえ、和人は？」

裕希が尋ねる。秀は首を振り、

「桜と闘ってるよ。」

「駄目だよ、止めなくちゃ！」

裕希は真剣な眼差しで、「闘っちゃいけない……そんな気がするんだ。」

「裕希……。」

「秀さん、俺を和人の所へ連れて行って！早く！」

朝子を胸元から離れた秀は、その真剣な眼差しに、

「判った。だけど、お前まで『闇』の闘いに巻き込む訳にはいかない。」

「だけど」

裕希は反論した。「俺にも何か出来るかもしれない。桜の本当の意味を、存在を。」

「そうか。」

そう言つて、秀は右手を差し出した。

「行くぞ、裕希。」

差のばされた手を強く握り、裕希は、朝子と早坂に、

「先に行つてる、後から追いかけて来て！朝子さん、早坂さん！」

「判ったわ。」

朝子は頷くと車に向かって走り始めた。
その時にはもう秀と裕希の姿はそこにはなかった。

2・月夜（がつや） - 3（後書き）

いよいよクライマックスですねー。。。眠い。。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4043n/>

MOON-4 夜叉 4 < 3 1 >

2010年10月9日00時10分発行